
ある非日常の日常

零崎 黒識

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある非日常の日常

【Nコード】

N8688Y

【作者名】

零崎 黒識

【あらすじ】

ある事情のある少年、朝霧海斗はある人に拾われて桐咲学園に入学するも1年でやめることに。その日、誘拐事件に遭遇する。海斗は、非日常を求めて、その事件を解決しようとする。そこからはつながらぬ物語。

非日常の始まり（前書き）

初めての投稿デスので、至らないことがあると思いますが暖かい目で見守ってください。（ペッコッ）

非日常の始まり

目を開けるとあたりは暗闇だった。

周りを見てもどこもかしこも暗闇、暗闇、暗闇。
匂いは、何か分からない血の匂い。
部屋のような場所なのか外なのか分からない。
手には、一丁の拳銃。

ああ、意識がやっととはつきりしてきた。
足元には前はヒトだった塊があった。
そうか俺は、ここであいつを……

「……と・いと・海斗、海斗起きるもうそろそろ時間だぞ。」

と同室の小楠環おぐすたまきが話しかけてきた。

「あと五分ほどで起きる。」

「起きていないじゃないか。早く起きないと遅刻するぞ」

「ああ」

しかし久しぶりにあの夢を見て起きる気になれないし、今日は、終業式であるため出なくてもばれないだろう、ばれたとしても進級する気はないしな、と考えていると。

「今日はさぼるなよ、終業式、出ないと進級できないぞ。」

心の中を読まれたように、先回りされた。

「チツ、分かったよ。」

仕方なく体を起こし、朝食等を素早く済ませ、壁に掛けてあった制服に袖を通した。後これに何回袖を通すのだろう、と考える、制服のポケットに入っているこの紙を、あの校長に出せばもうこの場所には用はなくなる。本当にあと何回だろうな、とか考えていると。

「用意ができたなら行くぞ。君のせいで私まで遅刻してしまいそうだ。」

と環は困った顔をしていた。

だったら待っていないくてもいいのに、と思いつつも

「もういいぞ、じゃあ行くか。」

環よりも先に部屋を出て行った。

私が待っていたはずなのだがな、とぶつぶつ言っている環をほって学校へ向かった。

ここは学校の寮だから、歩きで学校まで15分とすぐに着く。

そして学校の校門まで来た。私立桐咲学園しりつきりさきがくえん、ここは普通の学校と違いお嬢様学校である。では何故俺みたいな男が居るかというところ、ここがほかの学校とは違い、この学校のお嬢様を守るボーディーガード養成学校である。しかもその男たちはほとんどの生徒がお金持ちや、家族代々この学校の出でそのため入ってきた等の理由でいる奴らが多い。しかし俺は、お金持ちでもないしましてや家族がこの

出ですらない、むしろゴミのような存在だ。そこまですらないか。まあいい、だからここには普通の奴は近づかない。

学校内に入り中庭に出ると、変に捻っていないふつ々の学校にはない清潔感でいっぱいである。緑が生い茂り、しかしどこも汚れていない。さすが一流学校である。

敷き詰められている石は一つ何万以上するらしく、持っていこうとするここはいたるところにある監視カメラで監視されており見つかるらと捕まってしまう。

まあ、ほとんどがお金持ちであるためそんなことをする奴なんかいるはずがないだろうが。

「あれ？海斗じゃん。意外と早いお付きで。」

「ああ、環のせいだな。もっと寝ていたかったが。」

「まあ、そうだろうな。ほとんど時間ぎりぎりで教室に入ってくるし、でもその割に焦って入ってこないから狙ってやってるのかもな。その辺はどうなんだ？」

「そんなわけねえだろ。偶然だ、偶然。」

「ふーん、まあそういう風にしといてやる。」

話しかけてきたのは、皆川侑祈^{みなかわ ゆうき}、同じクラスメイトである。

こいつは他の奴とは違いロボットである。どっかの金持ちがすべての技術を駆使して作り上げたいわゆる“最高傑作”だそうだ。

しかし、殆ど人間にしか見えない。普通に食事もできれば、排泄もするし、睡眠もとる。人間より人間に見える。さすがに、力は人間以上であるため制限してるらしいが……。しかも侑祈は自分が口

ロボットであるとは思っておらず人間だと思っている。

そんな風に侑祈のことを思っていると、

「なあ、今日、発表される日だよな。」

「・・・何の？」

「恍けちゃって、これからボディーガードに就くお嬢様だよ。」

「ああ、そんなことあつたけ。」

「就くなら、かわいいお嬢様がいいよなあ、なんなことやこんなことできるかも知んねえぞw」

「おい、音声拾われてたら、終わりだぞ。そんなこと言ってる」と

そう、この学校は1年間は、ボディーガードになるための訓練等を受けて全校200名の中で上位40人が進級でき、2年になってお嬢様のボディーガードに就く仕事を課せられる。そしてこの終業式の日、つまり今日の、進級する40名にお嬢様の名前が発表される。決まらない奴もいつらしいが、新学期が始まる時に発表される。さっきバカ（侑祈）が言っていたが、お嬢様に手を出すこと厳禁になっている。ましてや恋愛関係になってしまったら社会的に排除されてしまう。

「大丈夫、大丈夫。俺はもうお嬢様決まってるし。」

「ああ、原屋敷のお嬢様だっけか、・・・こんなロボット作らなくても普通に人間を就ければいいだろうに。」

最期は聞こえないぐらいの声で呟いた。

「なんか言ったか？」

「いや、なんでもない」

「あ、もうそろそろ終業式が始まるぜ、早く講堂に行くか。」

「ああ」

環は先に行つてここにはいなかったが、先に行つただるろっから気にはしないが、
二人は講堂へ向かった。

就職先

侑祈と二人で講堂の中に入ると、すでに、進級する生徒はほとんど揃っていた。

ちなみに進級しない160人もこの終業式に参加する。当たり前に参加すると思われやすいが、この学校は特殊であり、40人しか進級しない。だから他の奴は、進級できない。やりなおすと選択肢があるがあるが、しかし、その奴らのほとんどはやめていく。40人に入れなかつた時点であきらめるか、親が許さないかの理由でやめる。まあ、稀にそのまま残って入った1年とがんばるやつもいるらしい。

席まで行くと、

「また、遅刻ギリギリでの到着か。しかし、よく進級できたな。貴様のような分からん奴が進級するなぞ思わなかつたぞ。」

と、嫌味を言ってくるこいつは長谷部嵐^{はせへめじ}、代々この学園出らしく、しかも金持ちときたまじめ君である。

「わるかつたな、俺が進級して。」

「ふん、せいせいお嬢様に捨てられないようにするんだな。」

そんなことを言ってるやつをほっておいて自分の席に向かった。

「私と一緒に来たのになぜギリギリに来るのやら、しかも侑祈が居

ながら。」
と呆れた顔をした環が居た。

「侑祈がトイレに行つて踏ん張ってるのを待ってたら遅れただけだ。」

「おい、嘘いつてんじゃないー」
と隣の侑祈が突っ込んできたが無視して席に着いた。

座つてすぐに終業式が始まった。

終業式が終わり、進級する生徒だけ教室に呼ばれた。
理由は、これから就くお嬢様の話である。

クラスでは、話してるやつもそこそこいて、俺の周りには、環、侑祈、嵐が居た。

「なあなあ、お前らつてどのお嬢様に就くのかね？」
と侑祈が聞くと

「ふん、僕は当然鳳凰家の長女、朱里様が当然だな。」
と嵐が言った。

しかし、俺には鳳凰家と聞いても分からなかった。
「鳳凰家つて何だ？」
と聞いてみると、3人から呆れた顔が返ってきた。

「鳳凰家のことも知らないのか。この日本のは殆どの実権を握っている財閥だぞ。ほんとに知らないのか？」
と聞かれたが

「全く知らん。殆ど興味が無いからな。」

「まったく、本当によくこれで進級できたな。」
と嵐は呆れていた。

「でもよ、その長女ってあの噂があるじゃん？」
と侑祈が言ってきた、

「あの噂？」

「おう、その噂とは・・・」

と聞こうとしたとき、教官が教室に入ってきた。

「お前ら、早く席につけ。HRを始めるぞ。」
みんなが話をやめてそれぞれの席に着いた。結局噂の話を聞けなかったのと思いながらぼんやりとしていた。

「起立、礼。」

嵐が号令をかける。

「うむ、ここにいる40名が進級することを心から祝福する。だが、これからはお嬢様の命を守るボディガードとして生きなければならぬ。お嬢様の危険にはどうするかを考える。そうだな嵐答える。」

指された嵐は、ハイと答え、

「我々、ボディガードの役目はお嬢様の命を自分の体を盾にしても守り抜くことです。」

「お嬢様に銃を向ける奴がいたら？」

「お嬢様に前に立ち体で守ります。」

「自分が死ぬかもしれない、躊躇することはないか？」

「いえ、我々は、お嬢様の命を守るためのものであるため恐怖を抱きません」

と教科書通りの答えを嵐は答えた。他の生徒もうなずいていた。が、俺は何もしなかった。そのことが教官に見つかり、

「嵐、もういい。朝霧お前はどうか？」

と聞かれた。

素直にうなずいとけばよかったと、思いながら、席を立ち

嵐が言ったことを、繰り返した

「我々、ボディガードの役目はお嬢様の命を自分の体を盾にしても守り抜くことです。」

「お嬢様に銃を向ける奴がいたら？」

「お嬢様に前に立ち体で守ります。」

「本当にそうか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「もういい。もう少し自分が今から就くことを考えてくれ。」
と教官も、他の奴らも呆れた顔をしていた。

「さて、意識を確認したが今から就くお嬢様の発表を行う。まず主席長谷川嵐」

ハイと嵐は席を立ち教官の前まで行った、

「お前は、主席と言うだけあってそれなりに高い位の人に就いてもらう。」

「それはもとより覚悟をしております」

「そうか、では発表する、新学期からお前が、就くお嬢様は鳳凰家の次女鳳凰彩せあひおひいろに就くことを任命する。」

そう、教官が言うと、嵐は「えっ！」とうろたえ始めた。
周りもざわめいていた。

「彩様ですか？ 朱里様ではなく。」

「そうだ」

と教官は答え

「あの噂は本当だったのか」

と嵐は神妙な顔をした。しかし教官が

お前は噂なんぞを信じるのかと聞かれ、慌てて訂正をしていた。

「なあ、噂って何だたんだけ？」

と隣の侑祈に問うと、

「朱里様は自分の周りにボーディーガードをつけないという噂だ」

と答えてきた。

ふむ、そのお嬢様は、人嫌いなのだろうと自分の中で思った。
そして

「次、小楠環」

と環が呼ばれた。環も嵐に習いハイと答え、席を立った。その間に嵐は自分の席の戻って行った。

「環お前は1学年上の神埼萌に就いてもらう。」
周りがさらにざわめき始めた。

「本来なら、同じ学年のお嬢様に就けるのが普通なのだが、少し事情があつてな」と言い

「いえ、守ることに変わりがないので」と環は答え、自分の席に戻って行った。
そうして他の人も呼ばれていった。

.....

「次、皆川侑祈」

「はいよー」

と気の抜けた返事をして前に出て行った。

「お前は、前からわかっていたと思うが・・・」

「ああ、妙ちんでしょー、りょうかーい」

「主人をそんなふうに・・・まあいい、粗相のないようにな」と教官も諦めて言い放った。

侑祈は何も気にしないふうに、席にもどっていった。

「最後に、朝霧海斗」

「ああ」

と気だるそうに答えて、教官の前まで行った。

「お前の就く相手はまだ決まっていない。新学期まで期待してくれ」

と教官が言ったが

自分は内心ホツとしていた。

「決まってるのか」

と嬉しそうな声で行ったのが教官に聞こえて怪訝な顔をされたが自覚をもうちよつと持つてくれ、つと言って終わった。

「今日、決まった者も、決まらなかった者も気を引き締めていくように。それでは解散」

と教官が言っただけで教師から出て行った。

また、侑祈、環でこの後の話をしようとしたが、取り合えず教室を出るか、と言い出し教室を出た。

出た、すぐのところには嵐が居た、

「彩様か・・・」

「そんなに彩様がだめなのか？同じ鳳凰家だって言うのに」と聞くと

「朱里様と彩様とでは全然違う、自分の出世も懸かっているからな、しかし朱里様より彩様のほうが扱いやすいから点数が加稼ぎしやすいか」

とニヒルの顔をしていた。

「まあ、環も大変だよな。学年上の神崎様なんてよ」と侑祈が聞いた

「まあ、大変だがそれだけ遣り甲斐がある。しかも剣の達人であるため技を見せてもらいたいしな」と環は嬉しそうに答えた。

「海斗は・・・？」と聞いてきたので

「ああ、俺はまだ決まってないそうだ」

「ふん、お前なんぞつけるお嬢様が居ないのだろう。」と嵐が嫌味を言ってきた。そんなのを無視して

「この後お前らはどうする」と聞いてみると

「とくにやることがないから部屋に帰る」

「私も」

「俺もやることないけど、外に遊びに行くかな」

と三者三様の答えが返ってきた。

「海斗はどうすんの？」

と侑祈が聞いてきた

「俺はこの後用事があるからな先帰ってていいぞ」
と答えると、

三人は学校を出て行った。

「さてと、校長のところに行くか」
と校長室に向けて足を運んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8688y/>

ある非日常の日常

2011年11月27日00時49分発行